

連珠っておもしろい

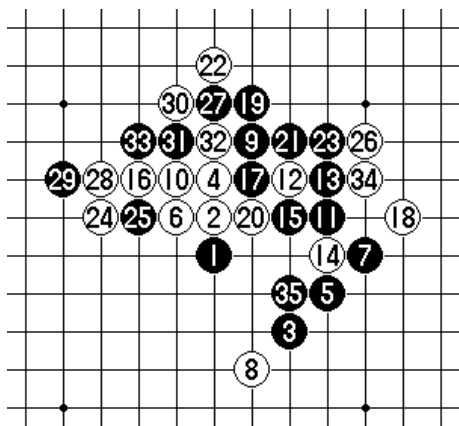
九段 河村典彦

● 第86回 ●

■ 四珠交替打ち元年

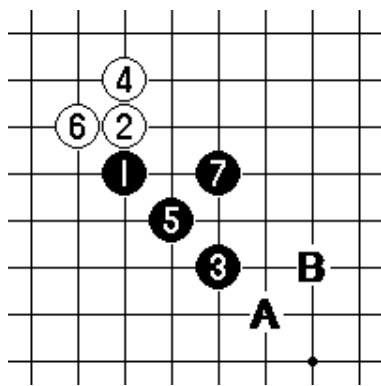
まずは、前回の訂正から。前回、「理事長の仕事」としていろいろ紹介したが、その中で、『一般社団法人も公益社団法人も変更手続きは同じで1万円が必要なのも同じ』と書いたが、実はこれが間違いで、公益社団法人であれば1万円は不要だとわかった。公益社団法人の特権をようやく実感することができた。しかし、こちらの認識不足が原因で、書類不備で提出してしまっ

していきたい。さて、いよいよ世界戦が今年も始まった。個人的には四珠交替打ちが導入された影響がどれほどあるのかが一番の興味だった。Q Tでさっそく出現したのが遊星だった。

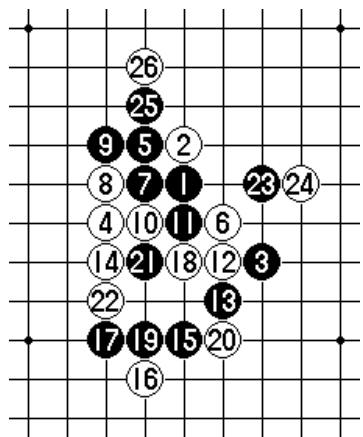


しかも白4!とはまたエライ手を研究している。これに対し黒5を七題指定している。打ったのは中国選手とロシアのエピファノフだ。白6と固まられるのが当然ながら怖いのだが、黒9から黒11、黒15と先手を

取って受けるのがなるほどという手である。この譜を見ていろいろ疑問が湧いてくる。そもそも黒5ではどこが定石なのだろうか?調べてみると、やはり三引きのようだ。



黒5と引いた時に白6で困っているように見えるが、黒7で必勝である。また、同じように黒5でAにも打てる。(白5止めなら黒7をBに打てるので、白6と止めるしかない) A Tでも遊星が現れている。スシユコフ・中山戦で打たれた。黒・スシユコフ 白・中山

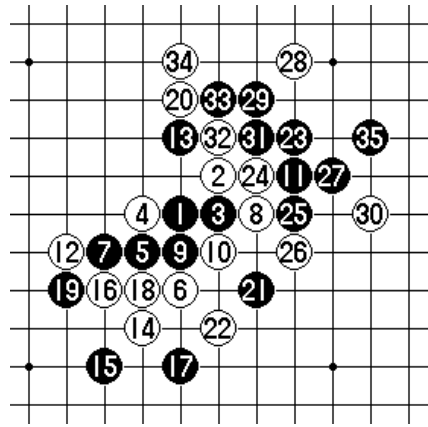


白4はなるほどという手で、黒5はこんなものだろうか。白14が勝負手で、黒はうまく処理して25に回ったが、白が何とか防ぎ切って満局となっている。

A Tでは、やはり中村名人がどこまで勝てるかというのが焦点であった。序盤で連敗するという予想外の事態が起きたが、中盤以降立ち直ってくれた。2敗目となった朱建鋒戦を見てみよう。

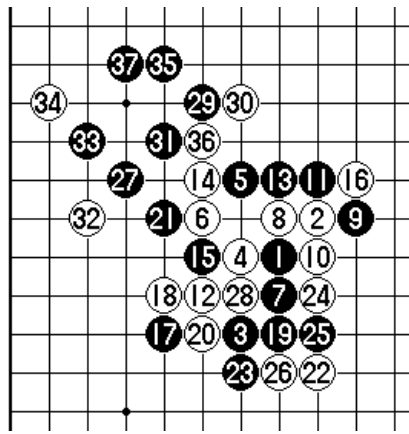
黒・朱 白・中村 雲月白4で八題は十分打てるだろう。中村名人がこの5を残し白6と打ったの

は、これなら防げるという直感があったのだろう。



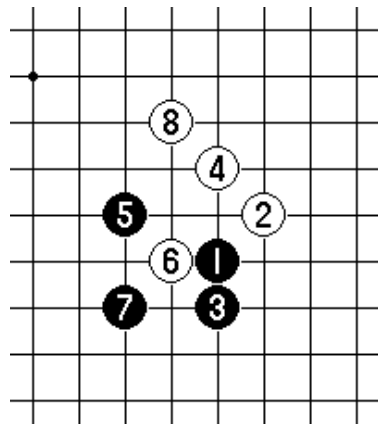
しかし、朱さんの打ち方が独特だった。普通なら黒9と白にノリ手を打たれる手はあまり考えないが、堂々と白10と打たせて黒11に止めておく手は、海外の選手らしい手で、この手に白は惑わされた。
白20と打ったあたりは悪くないと思っていただろうが、黒23と打たれて一気に形勢が悪くなった。序盤で力をためて中盤で一気に加速する、というのがルールが変わっても変わらない

打ち方であろうか。今年のATは最終局まで優勝決定がもつれ込む展開だった。最終局に直接対決となった。
黒・スシユコフ 白・朱



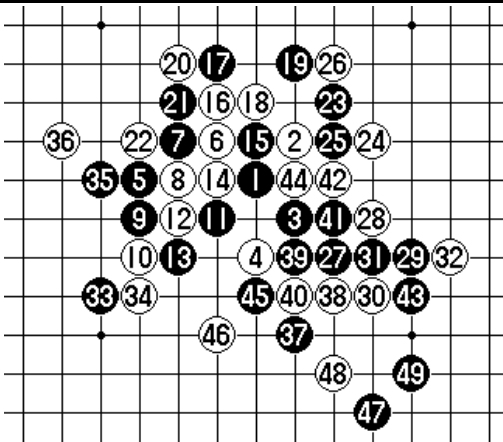
名月白4は八題でも足りないと思うが、白で打てない訳でもない。白12が少々欲張りだったか、黒15まで打たれると黒がかなりよく見える。黒21に白22は仕方がないのかもしれないが、黒27と大海原に先手で打たれてしまっただけ防ぐのは難しいだろう。
これでスシユコフは2度

目の優勝となったが、実はスシユコフはQT5位通過で、ぎりぎりの通過だった。こうなると、QTでスシユコフに勝っている小山君が一番強い？かもしれない。では、ATで気になった局を紹介していこう。
黒・朱建鋒 白・Qi (中国標記ができないので英語標記) 白8にて黒投了



今回は銀月もよく打たれた。白4は四珠交替打ちらしい一手だ。これで七題だから、訳が分からなくなる。黒5は何となくいい手に見えるが、白6と防がれて次の一手がわからない。黒7

が敗着となったが、正解を探すのも難しい。黒7は5の一路上が良さそうだが、ところどころが、この敗戦が糧になったのか、以後8連勝して2位になったのは元々実力があるからだろう。
黒・神谷 白・林皇羽
黒49にて白投了



浦月も題数指定打ちでブレークしたが、四珠交替でも白4を変えられるのでもっと可能性が広がる。黒5は神谷君らしい一手だが、うまく生かした。